

[論文]

国際ソーシャルワーク研究の新しいパラダイムに向けて

松尾加奈[※]

要旨

本稿は、イスラームの信徒（以下「ムスリム」とする。）が人口の多数を占めるアジア4カ国（パキスタン、バングラデシュ、インドネシア、マレーシア）について、イスラームの宗教施設やNGO団体が実施するソーシャルワーク活動とソーシャルワーク教育カリキュラムを調査した3年間の研究報告である。各国ではイスラームの教えに基づくさまざまな社会的救済活動（social work）が存在している一方、ユダヤ・キリスト教的価値基盤にあるソーシャルワーク理論偏重という専門職教育の課題が見えた。信仰や地域に土着の社会的救済活動（インディジナス・ソーシャルワーク）の探究は、「ソーシャルワークとは何か」を問う。国や国民、民族といったnationの境を越えて、普遍的なソーシャルワークとは何かを問い続け、グローバルに議論する研究モデルを、国際ソーシャルワーク研究の新しいパラダイムとする。

Key words：国際ソーシャルワーク、イスラームと「ソーシャルワーク」活動、
ソーシャルワーク教育、インディジナス

はじめに

日本は「出入国管理および難民認定法」を改正し、2019年4月より新たな在留資格として「特定技能」を創設した。また、2021年に開催される予定の東京オリンピック・パラリンピックを前に、メディアで「内なる国際化」「文化・宗教・民族の多様性を認める社会の構築」の言葉を見聞しない日はない。日本の社会では「国際」「多様性」は旬の言葉と言えらう。しかし、福祉専門職養成校を対象とした日本ソーシャルワーク教育学校連盟のカリキュラム調査（2018）では、国際社会福祉あるいは国際ソーシャルワークに関連する科目を開講している学校は過半数に満たず、「教員がない」「教材がない」という声が多くある。

日本国内の社会福祉研究は、社会福祉士の国家試験とその養成教育制度が確立した1980年代以降、福祉立法に基づく領域の研究は質・量ともに充実した。その一方で秋元（2018：48）は、日本の国際社会福祉（国際ソーシャルワーク）の議論が低調であることについて「あまりにもソーシャルワークコミュニティにおいて国際への関心が低すぎる」と指摘している。山名田（2016：69）は、日本の社会福祉研究は長年欧米研究が中心であったと指摘している。人口や面積が世界

※ アジア国際社会福祉研究所上席研究員（准教授）

のマジョリティを占める (majority world) 「開発途上国」は「第三世界」とも呼称されるが、山名田は、「『開発途上国』の福祉現場において、ソーシャルワーカーがどのような働きをしているかについて調べた先行研究はわずかである」と述べている。岡 (2020: 90) は、国際社会福祉の文献を概観し「国際社会福祉については、必ずしも定説があるように思えない」と述べている。また「国際社会福祉」と、世界で議論されている「国際ソーシャルワーク」が全くの同義とは言えない¹⁾ という課題もある。日本の社会福祉の持つ意味を写し取って英語に翻訳することは困難である。秋元は、「『社会福祉』の語を用いる限り、この語をどう英訳したらいいかとの問いに満足に答えてくれた日本の社会福祉研究者にはまだ会っていない」と述べる (2020: 26)。

日本以外に目を向けるとどうだろう。第三世界の研究者たちによる様々な領域の研究が専門誌『国際ソーシャルワーク』(International Social Work) に発表されているが²⁾、テーマは社会開発学・環境学・国際関係学・国際政治学・地政学など、日本の福祉立法に基づいた社会福祉研究領域を超えているものも多い。しかし、世界的にみても国際ソーシャルワークで何を教えるかという基準が明確になっているわけではない。ソーシャルワーク教育の国際団体「国際ソーシャルワーク学校連盟 (International Association of Schools Social Work: IASSW)」会長 Annamaria Campanini は、第3回淑徳大学国際学術フォーラム「国際ソーシャルワーク教育カリキュラムはいかにあるべきか」(2018年1月20日開催、日本ソーシャルワーク教育学校連盟・日本ソーシャルワーク学会共催、国際ソーシャルワーク学校連盟・アジア太平洋ソーシャルワーク学校連盟 (Asia and Pacific Association for Social Work Education: APASWE) ・日本社会福祉学会・日本社会福祉教育学会後援) において、「国際ソーシャルワークを世界でどのように教えているか」という問いに対して「国際ソーシャルワークとは何かという国際的な定義もまだない」(松尾・秋元・服部 2018: 77) と発言している。

本稿は、筆者が研究代表者となり2017~2019年度に実施した日本学術振興会科学研究費助成事業挑戦的研究(萌芽)「国際社会福祉研究の可能性: イスラム教とソーシャルワーク (17K18586)」の3年間の研究成果の報告である。申請した研究題目は「国際社会福祉」としたが、世界の研究者とは日本語の「社会福祉」ではなく、「ソーシャルワーク」を共通語として共有することができる。また上述のように、社会福祉とソーシャルワークは同義ではない。本稿では「ソーシャルワーク」の語を使い、「国際ソーシャルワーク」と表記する。

本研究構想の端緒は、2010年「APASWE/IASSW ソーシャルワーク国際定義再検討プロジェクト」に遡る。2010年11月4日に開催された APASWE/IASSW アジア太平洋地域ワークショップは、「IFSW (International Federation of Social Worker (国際ソーシャルワーカー連盟) / IASSW ソーシャルワーク国際定義) は「西洋的思考の枠組み」のソーシャルワークであるという声が出された (秋元 2018: 11)。参加各国 (バングラデシュ・中国・インドネシア・韓国・ネパール・マレーシア・ニュージーランド・フィリピン・タイ) からは、ソーシャルワークの国際定義への強い希望とともに、各地の文化・価値・ホーリスティックな視点や信仰 (スピリチュアリティ) をバツ

クボーンに含むべきという声が上がった (Matsuo 2011: 10).

また「専門職ソーシャルワーカーによらざるソーシャルワーク (Social work ≠ Professional social work)」(Akimoto 2013: i, 秋元 2018: 14) の実証研究として、国際共同研究報告「ソーシャルワークの第3ステージ, グローバルプロフェッション化に関する研究」(2013) や、ベトナム・日本共同調査研究「ソーシャルワークにおける仏教の役割——日本・ベトナム比較研究——」(2015), アジアの仏教寺院・信徒・僧侶たちによるソーシャルワーク機能を持つ行為に関する5カ国国際共同研究「Buddhist “Social Work” Activities in Asia」(2015), そして「西洋生まれの専門職ソーシャルワーク (Western-rooted Professional Social Work) から仏教ソーシャルワークへ」(2018) と研究が積み重ねられてきた。これらの研究に関与する中で、日本の社会福祉研究の領域にこだわらずに、国境を越えてソーシャルワークを議論することが国際ソーシャルワーク研究の一つになるのではないかという着想を得て、西洋的思考とも仏教的思考とも異なる枠組みであり、西洋的思考に残るキリスト教に次いで世界に信者数が多い イスラーム (イスラム教)³⁾ に着目した。

本研究は、イスラームの社会的な活動 (“ソーシャルワーク” のような活動) 事例を収集した2017年の研究 (Matsuo 2017) の次のステップとして、また、先行する仏教ソーシャルワークとの比較研究として、ムスリム (一般信者及び聖職者 (イマーム) を含む) が実施している相互扶助・支援活動でソーシャルワークと同じような機能を持つ活動の事例と、ムスリムが国民の多数を占める国におけるソーシャルワーク教育で宗教あるいは信仰 (spirituality) がどのように教えられているかという事例を収集し、西洋ルーツのソーシャルワークとの異同を考察したものである。

Kuhn (=1971: 10) は、パラダイムを「実際の科学の仕事の模範となっている例——法則, 理論, 応用, 装置を含めた——があって、それが一連の科学研究の伝統を作るモデルとなるようなもの」としている。本稿は、国境を越えて多くのソーシャルワーク研究者と情報を共有、議論する国際共同研究を通じて、国際ソーシャルワーク研究のパラダイム形成への先駆けを目指すものである。

I 研究の概要

目 的

第二次世界大戦後に独立したアジア太平洋地域の新興国の多くは、ヨーロッパの旧宗主国や、戦後復興と人材育成支援を進めた国連のプロジェクトを牽引したアメリカがソーシャルワーク専門職教育 (School of Social Work) に大きな影響を与えた (Midgley 1999: 244-245; 松尾 2013: 301; Matsuo 2015: 84-85)。本研究は、①アジア地域でムスリムが国民の多数を占める国を対象として、ユダヤ・キリスト教の価値観に基づくソーシャルワーク教育とイスラームの価値観の融合 (あるいは摩擦) の検証、②イスラームによるソーシャルワーク機能を持つ実践活動と西洋ソーシャルワー

クの実践活動の異同の検証, ③イスラームの価値基盤に基づくソーシャルワークのモデルを提示, 西洋ルーツのソーシャルワークとの異同を考察, の3点について現地研究協力者との共同研究から明らかにした上で, 新しい国際ソーシャルワーク研究の視点を提示することを目的とする。

方 法

(1) 研究対象とする国及び研究体制

本研究では, ムスリムが人口の多数を占め, かつアジア太平洋ソーシャルワーク学校連盟 (APASWE) の会員校が多いアジア地域の国から, バングラデシュ・インドネシア・マレーシア・パキスタンの4カ国を対象とし, APASWE会長Zulkarnain A. Hatta教授の協力のもと, 現地研究協力者4名を選定した。現地研究協力者は, 研究代表者が設計した調査ガイドラインをもとに, 各国のムスリムや宗教施設で実施しているソーシャルワーク活動のヒアリング調査を実施した。インタビュー対象者は, ①社会的に脆弱な立場にいる人々に支援するイスラーム系NGOと宗教指導者 (聖職者「イマーム」) と, ②ソーシャルワーク教育校教員とした。現地研究協力者及びインタビュー対象は表1の通りである。

表1 調査対象国・現地研究協力者・インタビュー対象

調査対象国	現地研究協力者	インタビュー対象 (団体数)
バングラデシュ	Isahaque Ali, PhD	モスク (1) ソーシャルワーク教育校 (3)
インドネシア	Adi Fahrudin, PhD	モスク (1) ソーシャルワーク教育校 (1)
マレーシア	Mohd. Haizzan Yahaya, PhD	NGO (3: 薬物依存者へのリハビリテーション施設経営 NGO, HIV/AIDS陽性の子ども支援者, ムスリム系 NGOが経営する養護施設) ソーシャルワーク教育校 (1)
パキスタン	Muhammed Jafar, PhD	モスク (1) NGO (2: 自然災害被災者支援, 教育支援, 農村地域開発) ソーシャルワーク教育校 (1)

本研究は人々の生活規範となる宗教及びコミュニティの活動の分析を含むため, 文化人類学・社会学の観点からの分析及び考察について研究分担者郷堀ヨゼフが担当した。また, 西洋ルーツのソーシャルワークとの異同について, 日本仏教社会福祉学からアプローチした分析及び考察を, 研究分担者である藤森雄介が担当した。

(2) 研究方法

調査対象国の現地研究協力者には, ①対象国の概要 (人口・面積・歴史など), ②社会的に脆弱な立場にいる人々 (貧困者・孤児・障がい者・女性・自然災害被災者など) を支援するためにムスリムやイスラーム系団体 (NGOなど) が実施している活動データの収集, ③ヨーロッパ諸国・

アメリカから伝播したソーシャルワーク教育（School of Social Work）において、イスラーム（あるいは宗教・信仰（spirituality））がどのように教えられているのかを明らかにすべくカリキュラムの収集を依頼した。また、研究代表者・研究分担者がそれぞれ調査対象国を訪問、現地研究協力者とともに聞き取り調査を実施した（表2）。

表2 研究代表者及び分担者による現地聞き取り調査日程

調査対象国	訪問先都市	期間
バングラデシュ	シレット	2018年1月4 - 6日
インドネシア	ジャカルタ	2018年1月22 - 26日
マレーシア	クアラルンプール	2018年10月23 - 27日
	ベナン	2018年3月9 - 12日
パキスタン	ラホール	2018年8月27 - 30日

また、ムスリムが少数民族として移住した地域に居住する場合のモスクの諸機能、イスラームの教義等を持つソーシャルワークと機能がオーバーラップする役割について、ドイツとルーマニア在住のトルコ人へのインタビュー調査を実施した（表3）。

表3 ヨーロッパにおけるムスリムコミュニティとモスクの役割調査

ドイツ	ケルン, ドゥイスブルグ	2018年8月6日~20日
ルーマニア	ブカレスト, コンスタンタ	

最終年度である2019年12月7日、東京・市谷にて「国際専門家会議ソーシャルワーク教育と宗教（スピリチュアリティ）」（Expert Meeting on Social Work Education and Spirituality）を開催し、各国の調査結果を分析した最終報告書を2020年3月に刊行した（Matsuo 2020）。

(3) 倫理的配慮

聞き取り調査にあたっては、事前に研究概要を説明した上で協力の同意を得た。また発表者と現地協力者とは異なる地域・文化・信仰であることを踏まえて倫理的な配慮の上、全ての研究を遂行した。なお本研究において個人への利益及び不利益ならびに危険性は生じないと考える。

II 結果

調査対象国における、イスラームの社会的救済活動やムスリムによる活動についてバラエティに富んだ実践事例が報告され、ソーシャルワーク教育上の課題も見出された。ここでは共通項目として抽出された4点に焦点を当てて結果を整理する。

まず、言語について触れておきたい。調査対象国は全て英語が母語ではないが、聞き取り調査の便宜上英語を使用した。本研究調査では、日本における社会福祉あるいはソーシャルワーク研究で定義されている「ソーシャルワーク」や「社会福祉」とは異なる活動も、「social work」で語られる場面が多くみられた。本稿では、本人達が語る言葉を記録することとし、日本の社会福祉研究の文脈で語られる「ソーシャルワーク」、「社会福祉」との相違を議論することはしない。なお日本人の研究チームは聞き取り調査で「ソーシャルワーク」という言葉を使用した。

1. 教義

現地聞き取り調査において、「パキスタンのソーシャルワークは、コーランの教えにある相互扶助や喜捨と同じボランタリーな『社会活動 (social action)』と一般的に認識されている」(災害復興支援 NGO 職員)、「あなた方が『それはソーシャルワークではない』と否定しても構わない。私たちが信じるイスラームの教えそのものがソーシャルワークである」(モスク隣接、地域(農村)開発に関わる NGO 職員)という発言や、またモスクで地方農村部に住む貧困層の子どもたちを寮に住ませ、コンピュータを利用した教育や聖職者になるための教育を無償で提供しているイマームは、「あなたが考えている『ソーシャルワーク』に私の活動が含まれていると思うか？私の活動はコーランの教えに基づくものである」という発言⁴⁾があった。ムスリムは1日5回の礼拝の定めがあるが、モスクは地域の人々との交流の場としての機能も持っている。専門家会議でも、マレーシアやインドネシア、パングラデシュ、ドイツ、ルーマニアからもパキスタンと同様に、地域の人々がモスクに集まり、情報交換をしたり生活の悩みを相談したり、聖職者から人生への助言を受けたりしているという報告があった。

またマレーシア・クアラルンプールでの聞き取り調査で視察した NGO は、支援者が自宅を解放して孤児を養育、学校に通わせていた。孤児たちは、両親が HIV/AIDS に関連して亡くなったり、HIV 陽性である子どもたちの養育を放棄したりと複雑な事情を抱えている。主宰者は自身の活動について「愛、情熱、思いやり、慈善精神に基づくものであり、支え合いはイスラームの教えである」と答えた。

「ムスリムは女性の立場が弱く社会参加が限られている」というイメージがある。しかし、パキスタンのソーシャルワーク教員(女性)は「イスラームの教えが女性の社会参画を阻む壁ではない」と答えた。女性支援を続ける NGO の幹部職員(男性)の発言も異口同音であった。ソーシャルワークに携わる教員・実践者が強調したのは教義よりも、貧困である。パキスタンでは貧困や伝統的な農業によって女性が家庭に縛られているという課題である。NGO 幹部職員は、「農村部の貧困層の子どもたちは市民登録されていない。市民登録されていないために、学校に通えない。学校に通えないために識字率が向上しない。文字が読めないために社会参加ができない」という構図がある」と言う。

2. 不十分な政府・公共サービス

また、政府が国際条約締結などの外的要因から国内のソーシャルワーク制度を整備し施行しようとしても、国内の限られた社会資源（人材・資金力など）では社会ニーズに対応でき得る十分な公共サービスの運用や提供は難しい、という実情が見えた。その一方で、宗教系NGOは国内外に人材・資金・ネットワークを持っており、ニーズに合った活動を展開することができていた。パキスタンでインタビューに応じてくれたNGO関係者、聖職者、ソーシャルワーク教育者たちから共通して聞かれたことは「政府はソーシャルワークに期待しているがリソースが足りない」という点であり、宗教系NGO団体が政府を代替する機能を持っていた。パキスタンの協力者の一人は「2005年の国連児童権利条約批准に合わせてラホールでは児童保護・福祉局が開設、虐待を受けている子どもたちの保護（親権停止を含む）等、一部西欧諸国と同様の活動を展開しているが、公的機関だけでは社会的ニーズに対応できない」（パキスタン、ソーシャルワーク教員）という発言もあった。貧困層の家族支援実践者として働くソーシャルワーカーは、公的機関からの支援が限られていることに合わせて、スピリチュアリティ（信仰、宗教）の重要性に触れた発言もあった。「貧困層の子どもの養育責任をそれぞれの家庭に押し付けるだけではなく、社会的機能として支えることの必要性がある。それは、経済的支援だけではなくスピリチュアルを含む精神的な支援の必要性ということもできる」（マレーシア、ソーシャルワーカー）という発言もあった。

3. 教材の欠如・不足

3つ目の共通点は、ソーシャルワーク専門職教育教材の欠如・不足である。パキスタンでは1945年からソーシャルワーク教育が始まったものの教科書は西欧諸国（アメリカ、イギリスなど）からの輸入が主流で、パキスタン国内の事情を取り扱った教科書がほとんどない。そのために実践や実習でパキスタンの人々の生活とのギャップを感じるという卒業生・実習生の声が大きく、教員がそのギャップを埋めるような授業の工夫をしているものの、国内の事情・事例・人々の生活からソーシャルワークを語る教科書は必要である。教員支援、教材開発を視野に入れたソーシャルワーク学校のネットワークをいかに形成していくかという課題も出された（パキスタン、ソーシャルワーク教員）。

2019年12月7日の国際専門家会議（日本・東京）において、バングラデシュ、インドネシア、マレーシアの現地研究協力者からも教材と教員の不足と、調査対象国におけるソーシャルワーク教育のジレンマが報告された。欧米諸国から伝播したソーシャルワーク専門職教育や実践には、理論的な枠組みとモデルが既に構築されているが、伝播先の生活様式や考え方に合わない。ところが自国のソーシャルワークを教えるために必要な教育資材（教科書、データ、文献、研究、教員）が不足しており、すでに完成された欧米諸国からのソーシャルワーク理論的な枠組みやモデルに頼らざるを得ない（Matsuo 2020：9）。さらに、ムスリムが人口の大半を占める調査対象国でさえ、ソーシャルワーク教育者が宗教を教えるのは難しいと感じていることも報告された。その

理由として、①ソーシャルワーク教育の教員自身が宗教を教えることに不慣れであること、②教員自身が宗教を信じていない、という2点の指摘があった (Matsuo 2020 : 9)。

4. 「インディジナス・ソーシャルワーク」からのソーシャルワークの捉え直し

インディジナス (indigenous) は、2014年7月に採択された「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」(IASSW/IFSW) の日本語定訳により「土地・民族固有の」と翻訳され、先住民のソーシャルワークと捉えられている。世界的にも the First Nation や First Peoples (土地土着の人々・民族) を尊重する視点と捉えられている (United Nations 2017: 213; IFSW 2019)

本研究では現地研究協力者との議論を通じ、研究当初には想定されなかった上記のインディジナスの視点への疑問が共有された。つまり、インディジナスを国連の枠組みにある先住民 (the First Nation) にとどめていいのか。「インディジナス・ソーシャルワーク」とは、ソーシャルワーク専門職が伝播する以前から世界各地に根づく信仰や慣習など「土着の利他的な活動全般」を指すものと理解すべきではないか、という疑問である。

参加した現地研究協力者からは、それぞれの国でソーシャルワーク専門職の制度が伝播する以前から行われている事例の収集への関心が高まったという発言が相次いだ。つまり、ムスリムが宗教活動の一環として実践している事例の収集である。イスラームによる社会的救済活動の調査継続は、自国の文化や生活にあったソーシャルワーク教材の開発につながるという希望と期待が寄せられた。

Ⅲ 結 論

ヨーロッパ諸国や米国から伝播したソーシャルワーク教育 (西洋ルーツのソーシャルワーク専門職教育) は、ムスリムが人口の多数を占めるアジアの国にも大きなインパクトを与えている一方で、西洋的思考の枠組みとは異なるイスラームの宗教組織 (モスク) やイスラーム系 NGO による、「社会的救済活動 (social work)」も存在している。本研究では、イスラーム系 NGO やモスク、ムスリムたちが提供する様々な社会活動のうち、ソーシャルワークと同じような事例を収集・記録した。調査対象国ではソーシャルワーク専門職により提供されている活動よりも、ソーシャルワーク専門職ではないムスリム (信徒、イマームを含む) によって提供される社会的救済活動 (social work) が、事例の数も、また活動範囲や地域も広範囲にわたっていたため、把握できたのは全容の片鱗に過ぎないという限界はある。今回、現地協力者とのネットワークができたこと、協力者の興味が生まれたことから引き続き交流を続けて情報収集をしていきたいと考えている。

第1の研究目的「ユダヤ・キリスト教の価値観に基づくソーシャルワーク教育とイスラームの価

価値の融合（あるいは摩擦）」について検証したい。調査対象国においては西洋ルーツのソーシャルワーク専門職教育の伝播、さらに各国・地域の実情、生活スタイルに適應できるソーシャルワーク教育の工夫、いわゆる「ソーシャルワークの現地化（インディジナイゼーションindigenization）」が報告された。ソーシャルワークのインディジナイゼーションが対象国のソーシャルワーク教育を豊かにし、ソーシャルワーク専門職養成教育に貢献していた。

2点目の研究目的「イスラームによるソーシャルワーク機能を持つ実践活動と西洋ソーシャルワークの実践活動の異同」について、ソーシャルワーク専門職の教育を受けておらず、イスラームの教えによる社会的救済活動（social work）が報告された。また、人々がソーシャルワーク専門職ではなく、聖職者（イマーム）に、その悩みを相談したり仲裁を依頼したり、支援を求めている例が多く報告された。これはイマームに対する人々の信頼が根底にあり、ニーズのある人々と介入する機能を持つモスク（介入する場）が提供されていることが要因の一つとして挙げられる。調査対象国ではソーシャルワーク専門職が活動できる介入の場の整備が未だ十分とは言えず、公共サービスの整備や教育の充実化など、解決すべきハードルが多い。社会資源が十分とは言えない国々において、社会的に脆弱な立場の人々を支えるために専門職ではない人々が支えあい活動をしていた。

また、教義（コーラン）に基づく利他的行動が、ムスリムによる活動の動機付けとなっていた。これはユダヤ教やキリスト教と同じように、イスラームも唯一の超越的絶対者である神への信仰の発露としての活動であることに起因する。聞き取り調査でムスリムたちには、自らの実践を「ソーシャルワークである」と規定する人もいれば、「ソーシャルワークではない。宗教上の活動である」とする人もいた。共通しているのは、イマームや市井のムスリムたちが社会に寄り添い実践することも、ソーシャルワークと同じような機能を持っており、社会の人々から「ソーシャルワーク（social work）」と称されていることである。この点は、仏教ソーシャルワーク研究の報告にも共通してみられる⁵⁾。

「ソーシャルワークは専門職（Social work is a profession）」との概念は世界中に広がっている（秋元 2018：5）⁶⁾。もちろん、西洋ルーツのソーシャルワーク専門職とは異なり、イスラームの施設やイマームを含むムスリムたちが実施しているのは「施し」であり、「支援する側」と「支援される側」は対等な援助関係であるとは限らない。また、イスラームにおけるジェンダー理解については、西洋ルーツのソーシャルワークが重視する人権理解との超えがたい壁の指摘もある。一方で、嶺崎はイスラーム言説におけるジェンダーについて、「解釈は敬虔であることと女性であること、そして自立することを肯定的につなぐために、なされるのである」と述べている（峯崎 2009：83）。またCanda（=2010：264）も、「宗派（たとえば、スンニー派とシーア派）、民族、国家の期限にもとづく多様性に加えて、個人や家族による解釈や選択に基づく多様性がある」と述べる。

第3の研究目的「イスラームの価値基盤に基づくソーシャルワークのモデルの提示と西洋ルー

「ツのソーシャルワークとの異同を考察」については、上述の通り全容把握まで至らなかったためにモデルの提示は難しい。しかし調査を通じて考えられる新たな研究の仮説モデルが見えてきた(図1)。

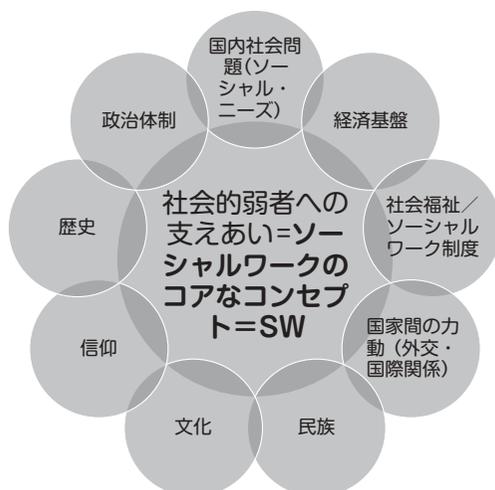


図1 ソーシャルワークのコアを取り巻く変数のモデル(調査対象国のケースから)

調査対象国をはじめとするイスラームの世界では、教義によってコミュニティ同胞のためにムスリムが実践している活動があった。コミュニティの中で脆弱な人々(孤児、寡婦、貧困者など)を支える信仰に基づく社会的救済活動(social work)である。ザカット(喜捨)のような社会的救済活動は、ソーシャルワーク専門職の教育や制度の導入よりもずっと前から続いていた。これらの活動と同様のものは、仏教信徒・僧院・僧侶の間にも存在していた。郷堀はこれを「ソーシャルワークのコアなコンセプト」(郷堀 2018: 55-57)と表現する。

図1のモデルは、社会的弱者への支えあい活動である「ソーシャルワークのコアなコンセプト」を持つ社会的救済活動が、各国・地域が持つ社会的変数によって、ソーシャルワーク専門職に成長したり、あるいはボランティアな活動として展開されていることを表したものである。活動主体が専門職か非専門職かは問わない。

ソーシャルワークを非専門職のソーシャルワークを含めた活動と捉える研究は、国境を越えてソーシャルワークとは何かを捉え直すことである。

国や国民、民族といったnationの境を越えて、普遍的なソーシャルワークとは何かをグローバルに議論する研究モデルを表したのが図2である。このモデルが示すように、ソーシャルワークのコアコンセプトを「ソーシャルワーク」として捉えて普遍的なソーシャルワークをグローバルに議論することが、国際ソーシャルワーク研究の新しいパラダイムであり、ソーシャルワーク議論の進展に貢献すると考える。

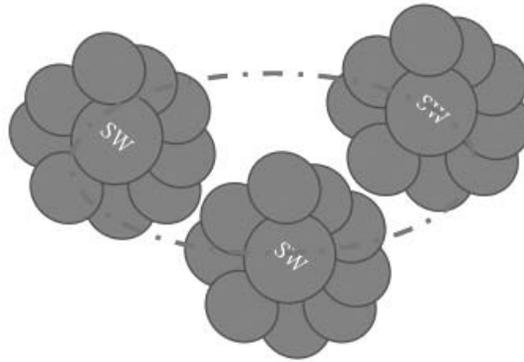


図2 国際ソーシャルワークの研究パラダイム案（各国の持つ図1「ソーシャルワークの変数」を踏まえたうえで、国境を越えソーシャルワークのコア部分を議論する）

おわりに

日本の国際社会福祉研究は、国内の福祉制度や社会福祉サービスに基づく特定の分野について、国際比較研究、先進国の事情、国内に住む海外にルーツのある人々（在留外国人、難民、滞留外国人等）への文化・言語の多様性に配慮した福祉サービスの議論、途上国支援実践報告に焦点を当てて進められてきた。「国際社会福祉」という言葉が日本固有の「社会福祉」に「国際」をつけているため、日本の社会福祉制度・研究のための国際社会福祉研究とも受け取ることもできる。

本稿ではあえて国際社会福祉という言葉を使わず、国際ソーシャルワークと表記した。また、「グローバル・ソーシャルワーク」という言葉（Noble 2014）についても指摘したい。2014年に刊行された“*Global Social Work: Crossing borders, blurring boundaries*”の中で、Healyは「International Social Work or Global Social Work」と並べて記述していた（Healy 2014: 373）。しかし、2018年に来日した際、Healyは「グローバルよりも制約をつけた言葉である international を使うと述べている（2018: 16）。本稿では、国際ソーシャルワーク研究について、国境と民族を明確に意識する必要があると考え、「国際ソーシャルワーク」=「International Social Work」とした。

残念なことに、上記のような国際ソーシャルワークや国際社会福祉の枠組みの議論は、日本では長年不活発なままである。国際に関する社会福祉カリキュラムが整備されていないという日本ソーシャルワーク教育学校連盟の調査（2018）はこの現れとも言えるだろう。

国際ソーシャルワークの研究は、専門職だけではなく宗教者など非専門職によるソーシャルワークについても視野に入れ、「ソーシャルワークとは何か」をグローバルに議論することで、世界のソーシャルワークそのものを発展させ、次世代に橋渡しする研究である。

謝辞

本研究に協力してくださった全ての研究者・インタビュー協力者に感謝の意を表します。またアジア太平洋ソーシャルワーク教育学校連盟 (APASWE) 会長 Zulkarnain A. Hatta 教授には、現地研究協力者の選定やイスラームとソーシャルワーク全般について支援と助言をいただきました。本研究遂行にあたり、文部科学省日本学術振興会の JSPS 科研費助成金 (JP17K18586) の研究資金提供が大きな支えになったことは言うまでもない。心より御礼申し上げます。

【注】

- 1) 日本国内における「社会福祉」、「福祉」と英語の「ソーシャルワーク」、「ソーシャル・ウェルフェア」との間に概念の差異がある。「社会福祉」にはより良い状態、幸福 (well-being) の意味があり、また社会福祉法は Social Welfare Act、社会福祉士を Certified Social Worker と英語で呼称し、国際社会福祉協議会は International Council on Social Welfare である。ソーシャルワーク教育学校連盟の国際団体は International Association of Schools of Social Work であり、上述の日本ソーシャルワーク教育学校連盟は福祉専門職の教育機関が加盟している。
- 2) 『国際ソーシャルワーク』 (International Social Work) は、国際社会福祉の国際ジャーナルとして、国際ソーシャルワーク教育学校連盟 (IASSW)、国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW)、国際社会福祉協議会 (ICSW) が共同で SAGE 社より発行している。
- 3) 本稿では「イスラム教」「イスラムの信仰」を「イスラーム」と表記する。
- 4) このイマームによれば、貧困家庭の子どもに無償で教育を提供するイマームは多くはないという。
- 5) Sherpa は、「釈迦牟尼仏陀は最も偉大なソーシャルワーカー」と述べている (=2018: 85)。
- 6) インディジナイゼーションも、グローバル定義以前から Ng & Sim (2005) や Ferguson (2006) など海外では論文が見られる。また本稿で指摘する「非専門職」とイギリスにおけるソーシャルワークの「脱専門職化」(伊藤 2006) とは異なる。もともとソーシャルワーク専門職が存在しているイギリスとは異なり、本論で取り上げたのは、そもそも専門職としてのソーシャルワークが存在しない (あるいは社会ニーズに比して極端にその数が少ない) 国々における非専門職によるソーシャルワーク (あるいはソーシャルワークのような活動) である。

【文献】

- ACWeIS (2011) International Definition of Social Work Review: APASWE/IASSW Asian and Pacific Regional Workshop (4 November, 2010), APASWE/Japan College of Social Work.
- Akimoto, T. (2013) Introduction Social Work ≠ Professional Social Work: Social Work as an entity in a Society Understanding in the eyes of people in communities, Sasaki A., ed. 2013. (Professional) Social Work and its Functional Alternatives. (Hd. Akimoto, T.), 日本社会事業大学アジア福祉創造センター (ACWeIS)/APASWE, i-iv.
- 秋元 樹 (2018) 「第 1 部 西洋専門職ソーシャルワークのグローバリゼーションと仏教ソーシャルワークの探求」郷堀ヨゼフ・秋元 樹・藤森雄介・ほか編著『西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ: 仏教ソーシャルワークの探究』学文社, 1-53.
- 秋元 樹 (2020) 「第 1 章 国際社会福祉論の目的と理念」岡 伸一・原嶋 博ほか編著『新世界の社会福祉 12 国際社会福祉』旬報社, 25-50.
- Canda, Edward and Furman, Leola Dyrud (2010) Spiritual Diversity in Social Work Practice: The Heart of Helping,

- Oxford University Press. (=2014. 木原活信・中川吉晴・藤井美和監訳『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か—人間の根源性にもとづく援助の核心—』ミネルヴァ書房.)
- Ferguson, Kristin M. (2005) Beyond indigenization and reconceptualization: Towards a global, multidirectional model of technology transfer, *International Social Work*, 48 (5), 519-535. DOI: 10.1177/0020872805055315
- 郷堀ヨゼフ (2018) 「コラム5000年の話」郷堀ヨゼフ・秋元 樹・藤森雄介・ほか編著『西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ：仏教ソーシャルワークの探究』学文社, 55-57.
- 郷堀ヨゼフ (2019) 「仏教徒ソーシャルワークを考える時に～ソーシャルワークの文化的背景に関する考察～」『淑徳大学アジア国際社会福祉研究所アジア仏教社会福祉学術センター2017年度年報』(2).
- Healy, Lynne M. (2014) Global education for social work: old debates and future directions for international social work, Noble C, Strauss H. and Littlechild, B. (eds) *Global Social Work: Crossing borders, blurring boundaries*, Sydney University Press, 369-380.
- IFSW (2019) IFSW INDIGENOUS COMMITTEE BUILDS FRAMEWORK FOR THE FUTURE. (<https://www.ifsw.org/ifsw-indigenous-committee-builds-framework-for-the-future/>, 2020/9/25).
- 伊藤文人 (2006) 「包摂の実践者か、排除の尖兵か?—イギリスにおける脱専門職化するソーシャルワーク—」『現代と文化：日本福祉大学研究紀要』113, 123-141.
- (一般社団法人) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟 (JASWE) (2018) 『「2017年度一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟会員校における国際福祉教育に関するアンケート調査」報告書』(http://jaswe.jp/doc/2017_kokusaifukusikyoiuku_houkokusyo.pdf, 2020/9/29).
- Kikuchi, Yui ed. (2015) *Buddhist “Social Work” Activities in Asia*, (Headed by Akimoto, T. & Coordinated by Sakamoto, E.) 淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター.
- Kuhn, Thomas S. (1962, 1970) *The Structure of Scientific Revolution*, The University of Chicago Press. (=1971. 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房.)
- Matsuo, Kana (2011) III The Roles of Social Workers in Asia & Pacific and Some Ideas for the Definition –Reading Papers and session discussion Records–, ACWeIS (2011) *International Definition of Social Work Review: APASWE/IASSW Asian and Pacific Regional Workshop (4 November, 2010)*, APASWE/Japan College of Social Work. 7-11.
- 松尾加奈・秋元 樹 (2013) 「アジア太平洋地域におけるソーシャルワーク教育国際化の歴史—アジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟 (APASWE) の史的展開の側面から—」『日本社会事業大学研究紀要』58. 287-312.
- Matsuo, Kana (2015) *The Birth and Development of Asian and Pacific Association for Social Work Education - Internationalization and Indigenization-*, Asian and Pacific Association for Social Work Education (APASWE)/ Social Work Research Institute Asian Center for Welfare in Society (ACWeIS), Japan College of Social Work. 平成26年度国際比較研究報告書『アジア太平洋地域ソーシャルワーク教育発展の歴史の中におけるソーシャルワーク地域連盟の育成と役割』日本社会事業大学社会事業研究所アジア福祉創造センター.
- Matsuo, Kana (2017) *Religion and Social Work How Does Islamic “Social Work” Operate in Asia?* (Supervised by Akimoto, T., Headed by Fujioka, T.) [宗教とソーシャルワーク：イスラム “ソーシャルワーク” はどのように行われているか], 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所・日本社会事業大学社会事業研究所.
- 松尾加奈・秋元 樹・服部麻希 (2018) 『第3回淑徳大学国際学術フォーラム報告書 国際ソーシャルワーク教育のカリキュラムはいかにあるべきか』, 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所.
- Matsuo, Kana (2020) *JSPS KAKEN RESEARCH PROJECT “Social Work” and Religion in Asia –The Case of Muslim–: For the Evolution of International Social Work*. Asian Research Institute for International Social Work,

- Shukutoku University. [2017-2019年度日本学術振興会科学研究費助成事業挑戦的研究(萌芽)「国際社会福祉研究の可能性: イスラム教とソーシャルワーク (17K18586)」報告書].
- Midgley, James (1997) *Social Welfare in Global Context*, SAGE publications, Inc. (=1999. 京極高宣・萩原康夫監訳『国際社会福祉論』中央法規出版.)
- 嶺崎寛子 (2009) 「イスラーム言説をめぐるジェンダー戦略と権威: 現代エジプトの女性説教師を事例として. ジェンダー研究」『お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』12. 77-91.
- Ng, Guat-Tin and Sim, Timothy (2006) Globalization, indigenization, and authentization in social work, *Asia Pacific Journal of Social Work and Development*, 16(1), 1-5. <https://doi.org/10.1080/21650993.2006.9755987>, 2020/9/29.
- Noble, Carolyn, Strauss, Helle and Littlechild, Brian eds. (2014) *Global Social Work: Crossing borders, blurring boundaries*, Sydney University Press.
- 岡 伸一 (2020) 「第3章国際社会福祉論の総括と評価」岡 伸一・原嶋博ほか編著『新世界の社会福祉12 国際社会福祉』旬報社. 81-107.
- Sakamoto, Etsuko, ed. (2015) *The Roles of Buddhism in Social Work: Vietnam and Japan* (headed by Akimoto, T.), 淑徳大学・ベトナム国立社会人文科学大学 (USSH)・日本社会事業大学アジア福祉創造センター.
- Sherpa, Karma Sangbo (2018) Social Welfare by Buddhist Monasteries in Nepal, Gohori, J., Akimoto, T., Fujimori, Y., Kikuchi, Y. and Matsuo, K. (eds). *From Western-rooted Professional Social Work to Buddhist Social Work: Exploring Buddhist Social Work*, Gakubunsha. (=2018. 郷堀・ARIISW監訳「第2節 ネパールの仏教僧院におけるソーシャルワークの活動について」『西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ』学文社. 76-87.
- United Nations (2017) *Basic Facts about the United Nations*, United Nations.
- 山名田静 (2016) 「第三世界」のソーシャルワーカーに関する研究 (レビュー): 東南アジア, 特にフィリピンにおける歴史の変遷に焦点をあてて. 『北星学園大学大学院論集』. (7). 69-90.